

天才を探してー 一五〇年目のルドルフ・シュタイナー

フレデリック・アムライン著

一九七一年度のノーベル平和賞受賞者ヴィリー・ブラントは、ルドルフ・シュタイナーを二〇世紀において最も平和へ貢献した人物だと評しています。ネイション誌で長く編集者を勤めたビクター・ナバスキーは、回顧録で、「シュタイナーは時代の先駆者である」と評しました。また、ヨーゼフ・ボイスは、人間の本质を見抜いたシュタイナーに全く新しい文化の幕開けを見いだしたと言っています。オーウェン・バーフィールドは、シュタイナーを近代における重要な思想家ではないかと主張し、イギリス人らしからぬはっきりとした物言いで、「同時代の人たちのみならず一般西洋社会の精神史上シュタイナーのような才能が生まれたことはほとんど奇跡に近い。」と断言しました。

シュタイナーのことを理解している者からすると、こうした評価が過大すぎるため、逆に疑いをうんでしまう可能性も予測できますが、シュタイナーがそれほど稀に見る天才であるならば、なぜ彼の死後一〇〇年ほど経っても、広く世の中に知られていないままなのでしょう。

実は、同じような現象は過去にも見られました。例えば、アリストテレスは千年もの間、西洋社会から見向きもされませんでした。カトリック教会はトーマス・アクィナスの著作を彼の死後半世紀にもわたり発禁処分にしていました。一九世紀の初頭まで、バッハの作品は作者不明として取り扱われていたため、メンデルスゾーンがそれらをバッハの作品であることを証明する必要がありました。ゴッホは生きていたたった一つの作品しか売ることができませんでした。

こうしてみると、なぜこのように才能ある人々が見いだされずにいたのか不思議ですが、いずれシュタイナーの偉大さが理解されずにいた時代があったとは考えられない時が来るでしょう。

壁

さまざまな理由で才能が見いだされないことがあるとはいえ、才能が見いだされないままで良いという理由はありません。

シュタイナーは教育者、芸術家、哲学者、知識人、神学者、歴史学者、文化評論家、そして精神的指導者という多彩な経歴の持ち主です。しかし、これらの経歴を描いても彼の業績を余すことなく説明するのは容易ではありません。

一見シュタイナーは、宗教的指導者であるとか、オカルト信仰者であるとか、不可解な人物という印象を与えるため、軽くみられることすらありますが、決して宗教的権威主義者などではなく、むしろ、自らの権威性を強く否定し、自ら生み出した人智学を当初から「自由への哲学」だと唱えました。人智学者の中にはシュタイナーに対して必要以上の敬意を抱く人たちもいますが、彼はそんなことを望んではいませんでした。シュタイナーの著作物や講演をみても彼の人となりについての言及はほとんどなく、未完成の自叙伝には、若い頃に出会った人々のことや考えなどがつづられており、味気ないほど自分自身に関しては語られていません。シュタイナーは現実世界を超えたところにある精神世界の存在を確信していましたが、もしこのためにシュタイナーがオカルト信仰者や神秘的な人物と呼ばれるのであれば、プラトーンや、ケプラー、エマーソン、プランク、あるいはニュートンといった偉人たちもそう呼ばれるべきでしょう。

人智学という学問は、シーラーやヘーゲル、フヒテや特にゲーテなどといった思想家たちのイデアリズム（観念論）と深くかかわっています。これらの思想家たちはドイツ語圏ではよく知られていますが、英語圏に住む人々たちにとってはあまり馴染みがありません。これは、ドイツ的理想主義の精神が、英米の実証的で懐疑的なものの見方とは全く異なることにも一理あるでしょう。

シュタイナーは物質主義の絶頂を迎えた一九世紀の終わりまでに、大学で哲学研究を通じて自己の確立を目指しました。その後、労働者の教育運動に携わることでアイデンティティの確立を図りましたが、その頃にはドイツ語圏にも英米と同様の懐疑的な見方が強まっていたため敢え無く失敗に終わりました。

今でこそ広く理解されている無意識や感性開拓の存在は、シュタイナーの若いころには異端的なものでした。やがて彼が関わるようになった前衛的芸術サークルのメンバーたちでさえ、自分たちの殻に閉じこもり自然主義に走るだけで、シュタイナーの考えについて行くことができませんでした。しかしながら、シュタイナーの精神芸術世界は、その二〇年後に台頭するブルー・ライダー（青騎士の芸術運動）といった表現主義運動の先駆けとなりました。

シュタイナーの考え方に唯一、積極的な姿勢をとったのは、神智学徒たちでした。シュタイナーは神智学徒たちの講演に招かれ、最終的には「神智協会ドイツ支部」が設立された際に事務総長に選ばれました。

一九〇三年、シュタイナーは、自ら行った精神研究に関する講演活動や文筆活動を始めました。しかし、この神智学時代も数年しか続きませんでした。一九〇七年までにシュタイナーと協会上層部との間に意見の不一致が積み重なり、一九一二年、失意のうちに協会を去ることになりました。

その結果（シュタイナー自身が「人智学」と呼ぶようになる以前から使用されている）人智学の基本用語の中で、「アルパ（「形のないもの」という意味：エーテルのコンセプトと類似）」や、「プララヤ（「分離」という意味）」や、「デバカン（「神の土地」という意味）」などと言ったサンスクリット語が多用されるようになり、西洋の人々にとって親しみが持てないものとなってしまいました。シュタイナーの四大主著と一般的に言われる著作のう

ち、二つは極端なほど神智学的な本のタイトルとなっています。「神智学」はそのほとんどが心理学の内容ですし、Die Geheimwissenschaft im Umriß は、ブラヴァツキーのシークレット・ドクトリン（秘密教義）の副読本であるにもかかわらず、その英語版は長い間「オカルト・サイエンス」という見当違いなタイトルで出版されていました。後に、シュタイナーは新たな言葉を考え出しました。例えばデバカンについて、「存在」とか、「啓示」、「植物意識」、「鉱物意識」など実用的な意味合いを付けようとしたのですが、こうした用語の難解さも加わり、シュタイナーは高い評価を得られなかったと言えます。だからと言って、こうしたことは忘れ去られていた理由にはなりません。

周囲への働きかけ

もう一つ、人智学という言葉が難解な響きを与えてしまうこともシュタイナーが知られていない理由と言えます。人智学を理解するためには、それ特有の言葉の意味をしっかりと理解する必要があります。しかし、これは学ぶ価値のあるものすべてに対して共通して言えることであり、神智学はさておき、人智学で使われる言葉は、実際には簡単明瞭で直感的でさえあります。また、シュタイナーは物を書いたり、何かについて話す時は、大抵明瞭でした。難しいのは、その考え方にあるのです。シュタイナーの考え方こそがあまりに奇抜過ぎて難解なのです。シュタイナーはいわゆる千里眼というものを備え持った人でした。実際、私たちが経験したことのないようなことを経験したと言っています（もしかしたら、私たちも経験していても、勇気がなくてそれを言うことができなかつたり、あるいはそうだと気付かずにいるだけなのかもしれません）。シュタイナーは、こうした体験は、誰でもできるようになるとしました。

シュタイナーの教えの中心となるものの一つに、人類の文化はつい最近まで「天才」や「伝授を受けた人たち」によって形作られたものであるというのがあります。このような知識はいろいろな名称で知られていますが、シュタイナーは、ギリシャで長い間秘められていた「ミステリー（奥義）」としています。シュタイナーの四大主著である「いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか（高橋巖訳・二〇〇一年）」の冒頭部分に、一九世紀の終わりごろに起こった 重大な革命について記されています。そこでシュタイナーはこれまでの文化を刷新するために、今まで隠されていたものを公にする時が到来したと言っています。

シュタイナーはかつて受け身的で半意識的な外からの啓示の対象だったものを、今では自分から意識的に探し求めるべきだとしています。（この重大な革命の予示を）ロマン主義的な言い方をすると、映すだけの鏡（受け身）ではなく光を放つランプたりあれ、ということになります。

これこそがシュタイナーの言わんとしている人智学であり、神智学（神の英知）を人智学（人類の英知）と言い換えた理由です。バーフィールドも同じような思いで自らの人智学に関するエッセー集を「ロマン主義の成熟」と名付けたに違いありません。シュタイナーの思想は、例えば、偉大なアバンギャルドのアーティストであり人

智学者でもあるヨーゼフ・ボイスが、数あるモットーの一つとして「神秘的なことを実り多いものにしよう！」を選んだことなどに反映されているのです。

膨大な著書

シュタイナー作品の取り扱う範囲があまりにも広いということも、シュタイナーを知ることを困難にしている要因の一つであると考えられます。たとえば、一二冊もの著作がある人を多作と考えるのであれば、シュタイナーはその範囲を完全に超えています。

私はある時期、何カ月もの時間をかけてじっくりとシュタイナーの作品を読み込んだことがありました。息子は私がいつも持ち歩いていた緑色の二〇〇ページ程度のGesamtwerkというタイトルの文庫本を見てはため息混じりに、「父さん、その本、まだ読んでいるの？ そんなに分厚い本じゃないのに。一体どれだけ時間をかけているの？」と言ったものです。私は一笑し、それが本ではなく、ドイツ語のシュタイナー作品のカタログであり、実は四〇〇巻分ぐらい収録されているけれども、まだ未完成で、読んだ本の題名に印をつけているのだと説明しました。そのカタログには、本や書簡、また一般出版されたエッセー四五巻分が含まれており、三九回分の講演記録、さらに、神智学協会や人智学協会のメンバー向けに行った非公式の講義の速記録七〇冊分の学術書も含まれています。シュタイナーの残したメモ書きやスケッチ画、色彩画など数ダース分を付け加えることで全巻完成となりますが、彼の作品は今でもまだ翻訳されていないものが多くあり、書庫には、推敲途中のものや発行に至っていないものなどがまだまだ眠っています。彼の著作を原語で読むことができ、シュタイナーに一生を捧げる熱心な人智学者でさえ、シュタイナーの全作品を死ぬまでに読み終えることはできないのです。

シュタイナーを理解する上で難しいのは、例えばフロイトで言えば「夢判断」あるいはカントであれば「純粋理性批判」などのように一冊でシュタイナーの考えが集約されている代表作がないことにあります。シュタイナーは聴衆によって異なる表現を用いました。彼の非常に深い思考は、一般にも入手可能な非公開の講義にみられるのですが、四大主著を読破して初めて理解できるような内容のため、つい億劫になってしまうのです。

一般に、教育や農業などの分野でどうシュタイナーの理論を応用するかに興味を持たれることが多いのですが、それに関するシュタイナーの著書もいわゆる「シュタイナー四大主著」の理解を前提条件としています。シュタイナーの四大主著はそれぞれ異なる内容について書かれており、その中の一冊（神秘学概論）は壮大で難解な宇宙論を示しています。シュタイナーの醍醐味を体験するには、彼の作品を広く読み込む必要がありますが、シュタイナーについてどう勉強し始めたらいいかと問われると、長年研究を重ねている人智学者でさえ、回答に困ってしまうのです。それほど難しいとはいえ、それが見逃されたままで良いという言い訳にはなりません。

精神の科学

シュタイナーを受け入れにくい最大の理由は、彼の立ち位置が科学と宗教の間という本来であれば矛盾した場所にあるからなのかもしれません。シュタイナー自身はれっきとした科学者であり、科学の歴史と考え方を深く理解していました。しかし、精神世界の存在を身をもって体験したことで、人は誰も人智学の方法に従った修行を行えば、超感覚的認識を持つことができることを発見しました。

シュタイナーは、人類が単なる信仰というものを超え、まずは知識そして最終的には超感覚的認識を持つときが来たと主張しました。それが人智学をあえて「精神の科学」と呼んだことの所以です。人類史上、科学と宗教が分断されたことによる痛みを感じている人にとって人智学は非常に興味深いものである一方、長い間、科学と宗教のそれぞれの立場を譲らない人々にとってそれは招かれざることもかもしれません。

人智学は、宗教とはほとんど関係がありません。人智学とは、精神世界についての学問です。自然科学や宗教の立場に立つ人たちであれば、宗教世界と精神世界の違いがよくわからない、もしくはそれを区別する重要性が分からないと言うでしょう。シュタイナーの著作や講演は大半が、神学、特にキリスト教神学に関するものでした。しかし、彼の観点は非常に普遍的で、彼のいうところの「神キリスト」とは、特定の宗派や教会などを超えたところにある精神的な力、緻密で複雑にあらゆるものを超える存在でした。人智学は他の宗教との相性が良いのですが、特定の宗教に基づいて作られたわけでもなく、縮小版でもなく、あるいは、いくつかの宗教を合わせたようなものでもありません。

シュタイナーは自由思想家の家庭に育ち、心に湧き出る衝動だけを頼りに精神の研究に取り組み、さまざまな宗教的慣例にも捉われない自由な精神性を探し求めました。彼は、また、福音主義者たちが自らの救済ばかり話す利己主義さに嘆き悲しんでいました。

シュタイナーの人智学は近代科学の精神を少しも冒涇していないどころか、むしろ近代科学に敬意を抱いているぐらいです。しかし、今ある科学とその取り扱われ方については、シュタイナーは的を射た批判をしています。科学とは、あらかじめ方向付けがされた研究目標ではなく、しっかり客観的に研究し検証されたものであるべきだと言っています。近代科学は、自然をコントロールしたいという欲望や、不当な還元主義の考え方や、精密さをごまかそうとしたためにその根元で不透明になっていました。

フランシス・ベーコンは、科学者たるもの、『自然の神から鬱陶しがられ、自然を納得するまで追求すべきだ。』と明言しました。ベーコンは、科学者は自然に関する情報を発信し、資源を利用することが使命であると考えました。

「ノヴム・オルガヌム～新機関（原著一六二〇年）」の「計画」のところで、ベーコンは、「私は、占い師が未来を読むように、感覚的観察を無条件に信じるのではなく、敵地で将軍が戦利品を巻き上げるように、実際に資源を手にして科学のために利用するのだ。」と豪語しています。自然を思いのままに扱ったり、戦利品として解

釈した結果、今私たちが環境上の危機にさらされていることは何ら不思議な事ではありません。シュタイナーは環境問題を予言し、問題の真の原因に至る解決策も提言しています。

デカルトのあと、近代科学は実証的に説明できるもの以外、因果関係の概念を完全に排除し、目に見えない超自然的な現象を除外するようになりました。その結果、デカルト学派の研究者たちは、ニュートンのことでさえ科学に神秘主義的特性を入れ込んだと責めました。彼らに言わせると、ニュートンが理解する重力や力というものには因果メカニズムがないのです。

しかし、偉大な科学者たちは懐疑論者などではありませんでした。ニュートンは、数学や物理を研究すると同じくらいじっくりと時間をかけて、錬金術と神学の研究を熱心に行いました。そしてケプラー（カントに言わせると歴史上最も厳格な思想家）は、自らの懸命な努力で古代の英知の全体像を理解することができたのだと言っています。この英知は、長い間秘密とされ、その一部のみがピタゴラスやエジプトの奥義を通じてのみ知り得たとされていました。

シュタイナーは、こうした内容を探求するために科学的な方法を考え出し、彼の莫大な著書や講演は体系的な実験結果となっています。また、受け手次第で経験の解釈がまるっきり違うというゲーテの考え方に賛同しています。認識はすべて、すでに「それまでの経験によってできた考え方による」のです。ゲーテもシュタイナーも、最も精密な科学機器というのは、実は、自らの能力を高めた人間であると言っています。そのためゲーテは、想像力を豊かにするための鍛え方を考案しました。科学の最大の目的は、自然を支配の対象として見下すことではなく、私たちが自然の英知に少しずつ近づけるよう自分たちの能力を高めていくことです。シュタイナーも、ゲーテが考えていたように、科学の最終的な目標は、科学者を変えてしまうことだと述べました。フロイトやフッサールなどといったシュタイナーと同時代の人たちも、科学的に真摯に追求する姿勢が自己の精神生活にまで及んでもおかしくないと言っています。

科学の最終的な目標は、語源的意味においては学説(THEORY)です。THEORIAという言葉はTEATER（劇場）と同じ語源です。これは、精神的な事実を静観するという意味です。現象に関して沈思黙考をすることで得られる自己変革は、科学のアンチテーゼではなく、むしろ、科学の最終的な目標であり本質なのです。